

ラグジュアリー・ルネサンス

中野 香織

戦争は命ばかりでなく、文化や記憶、希望をも奪う。そんな戦火のなかであっても、針を持ち、刺繍（しゅう）を縫い続ける人々がいる。

今年5月、リビア大使館（東京・渋谷）で「Threads of Palestine（戦火の中の刺繍）」というイベントが開催された。前半では、パレスチナ大使の母が一生をかけて保管してきた100年以上前の衣装が披露された。それは単なる民族衣装ではなく、戦争によって奪われなかった尊厳であり、世代を超えて伝えられる文化のアーカイブだ。



パレスチナの民族衣装と、パレスチナ刺繍の帯をつけた着物

後半では、ガザの避難民女性が刺繍した布を、日本の着物職人が帯へと仕立てた作品群が紹介された。文

戦火のもとでの美と共創

海越えた刺繍と帯の融合

脈も技法も異なるふたつの文化が互いの形式と美意識を尊重しながら融合し、新鮮な美を表現していた。それは一方的な支援ではなく、ラグジュアリーの新たな形であった。

実話に基づく絵本「アハメドくんのいのちのリレー」（鎌田實著）の朗読も行われた。難民キャンプで命を落とした少年の父が、敵国の少女に息子の臓器を提供したという物語だ。「溺れている人に国籍を問うか？」という父の問いが重く響く。

いま世界は、戦争、格差、分断といった暴力にさらされている。その

なかで、ラグジュアリーの意味も変わらざるを得ない。破壊が進むほどに、人と人がつながり、物語を共有し、関係性そのものを価値として育むことが、深い豊かさを生み出す。

人間性が重視されるべき時代において、ラグジュアリーに求められる倫理と持続可能性の核心は、立場や文化を超えた共創にある。極限状態で縫われた刺繍が1万枚近く離れた日本で洗練された工芸へと生まれ変わるプロセスは、破壊的な時代にあっても創造が可能であることを示し、関わる人々に満ちあふれる喜びと希望をもたらした。動乱のなかにあっても人と人が協力して生み出す真の価値こそが、新しい時代の文化経済圏の基盤となるだろう。